

〔資料〕

2010年アート・クリティック活動の報告

編集委員：安藤隆之、酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

はじめに

この春、私たちの研究所は四半世紀の歩みを祝して叢書特別号の出版と記念イベントしてフォーラムとパーティを開催する。振り返るに、演劇研究グループは児童文化研究グループと並び、もっとも長い活動歴を誇っているが、中でも文芸サロン「アート・クリティック」は特筆すべき活動であった。正確に数えていないが、200回以上にはなるであろう。当初は演劇研究グループが正式なグループとして成立していなかったために所員第一号そして最初の事務局長（運営委員長）でもあった安藤がグループ形成の第一歩として賛同者を得る目的で、名古屋や東京の演劇公演情報や感想を記したB4のミニコミ紙「Art Critique」を発刊した。研究所の入口、講師控室に置いて読んでいただいた結果、数名の研究者が集まってくれて共同研究を開始することとなった。その後、演劇研究グループは劇場調査や理論研究を進めて数多くの論考を発表してきたが、ミニコミ紙「アート・クリティック」は文芸サロンへ発展した。月に一度、水曜日の昼休みに愛好家が集まって相互の観賞経験を報告して演劇談義を続けてきた。

これまで観賞報告と話題提供を内容としてグループ内部そして外部との交流を深めるサロンの研究会であったが、ここ数年、オペラ談義に花が咲いた。報告もオペラファンとしての感想から専門的な批評へと発展してきた。オペラ公演は東京だけでも300本以上になる演劇公演と異なり、上演本数も少なく東京から兵庫までの劇場へ出かけていけば全国の様子が把握できる。その結果、一年間を振り返って日本のオペラ制作の現状と課題について一定の判断をしてみようという運びになった。玉崎、服部の両所員を中心に原稿をまとめ、研究例会で発表したものをとりあえず「研究資料」として紀要に掲載するが、今後3年間、この活動を本格的に推し進めて「批評」という形にしてみようと思う。それがどこまで可能かは不明だが、来年号に一定の成果を発表できればと願う次第である。

（安藤隆之 記）

Ⅰ. アート・クリティック2010年に報告された観劇演目リスト

2009年度第8回から、2010年度第8回までにとりあげられた演目リストに参照用に通し番号をつけた。

- ①ミュージカル『グレイ・ガーデンズ』（宮本亜門 演出） 2009年12月19日(土) 12:00～ 中日劇場
(2007年トニー賞3部門受賞作) (玉崎)

- ②ベルガモ・ドニゼッティ劇場・オペラ『椿姫』 2010年1月16日(土) 17:00～ 愛知県立芸術劇場
大ホール (玉崎)

- ③エドワード・ボンドの『リア』（白井晃 演出） 2009年12月23日(水) びわ湖ホール・中ホール
主演：串田和美、緒川たまき、久世星佳 (服部)

- ④演劇『十二人の怒れる男たち』（酒井洋子 演出） 2010年1月30日(土) 11:00～ 名古屋市千種文
化小劇場
主演：大谷勇次・広田和也 企画制作：名古屋市文化振興事業団、名古屋市 (玉崎)

- ⑤演劇・名演『冬のライオン』（高瀬久雄 演出） 2月2日(火) 中京大学文化市民会館
主演：平幹二郎・麻実れい 名古屋演劇鑑賞会例会 企画製作：幹の会、(株)リリック (磯貝)

- ⑥歌劇・MET『ホフマン物語』 1月 MET ライブビューイング (磯貝・橋詰)

- ⑦歌劇『コジ・ファン・トゥッテ』 2月11日(木) 名古屋音楽大学公演 (玉崎・橋詰)

- ⑧歌劇・東京二期会『オテロ』（白井晃 演出） 2月20日(土) 14:00～ 東京文化会館大ホール (2010
都民芸術フェスティバル参加公演)
管弦楽：東京都交響楽団 合唱二期会合唱団 装置：松井るみ 衣装：前田文子 照明：斎藤茂男
制作：東京二期会 (服部)

- ⑨名古屋市文化振興事業団2010年企画公演・名古屋市文化基金事業 オペレッタ『チャルダッシュ
の女王』（伊藤明子 演出） 2月19(金)～21日(日) 名古屋市青少年文化センター アートピアホール
音楽監督・指揮：斎藤一郎 上演台本・演出：伊藤明子 振付：三代真史 演奏：セントラル愛知
交響楽団 主演：原田美織、鎗木勇樹、加藤恵利子 企画制作：(財)名古屋市文化振興事業団、名古

屋市

(服部・磯貝・橋詰・玉崎)

⑩宝塚・月組『紫子』(大野拓史 演出) 2月1日(月)～24日(水) 昼公演 中日劇場

木原敏江原作「とりかえばや異聞」 脚本：柴岡侑宏 主演：霧矢大夢 (磯貝)

⑪歌劇・MET『薔薇の騎士』&『カルメン』 2月 MET ライブビューイング (磯貝・服部)

⑫サントリーホール・ホール・オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』(ガブリエーレ・ラヴィア 演出)

3月14日(日) 16:00～ サントリーホール 企画・制作：サントリー財団 (玉崎)

⑬ミュージカル『レベッカ』(山田和也 演出) 3月16日(火) 12:00～ [3/5(金)～31(水) 37公演 (大劇場版日本初演)] 中日劇場 (1997ウィーン初演) (服部・磯貝・橋詰・玉崎)

⑭演劇・名演『シャンハイムーン』(栗山民也 演出) 3月18日(木) 中京大学文化市民会館

井上ひさし 作 音楽：小曽根真 振付：謝珠栄 制作：こまつ座 (磯貝)

⑮オペラ『ナブッコ』(演奏会形式) 3月28日(日) 15:00～ 愛知県芸術劇場コンサートホール

指揮：柳澤寿男・名古屋フィルハーモニー管弦楽団、AC 合唱団 舞台監督：大澤裕 照明：石川紀子 主演：直野資、大岩千穂、村上敏明、若林勉 企画制作：愛知県文化振興事業団

(服部・玉崎)

⑯歌劇・MET『シモン・ボッカネグラ』 MET ライブビューイング (服部)

⑰いずみホール開館20周年記念オペラ——岩田達宗プロデュース『ランスへの旅』(岩田達宗 演出)

4月17日(土) 16:00～ いずみホール (玉崎)

⑱ミュージカル映画『NINE』 (服部・玉崎)

⑲劇団クセック ACT『5年経ったら』 5月1日(土) 昼公演 愛知県立芸術劇場・小ホール

ガルシア・ロルカ 作(田尻洋一訳) 演出・構成・舞台美術：神宮寺啓 (服部)

⑳ミュージカル『ザ・ミュージックマン』(松本裕子 演出) 5月22日(土) 昼公演 愛知県芸術劇場

大ホール (1957年初演トニー賞8部門受賞;2000年再演) (玉崎)

㉑演劇・名演『令嬢ジュリー』(加来英治 演出) 5月20日(木) 中京大学文化市民会館

- 主演：栗原小巻 制作：エイコーン (磯貝)
- ②歌劇・MET『アルミード』ライブビューイング 5月27日(木) 10:30～ ミッドランド・スクエア・シネマ (玉崎)
- ③ミュージカル『絹の靴下』(荻田浩一 演出) 6月4日(金) 13:00～ 梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ 振付：名倉加代子 (玉崎)
- ④音楽劇『逆潮・サムライの帰郷』(日墨交流400年記念音楽劇) 7月6日(火) 18:45～ 名古屋市芸術創造センター 作・演出・主演：イレネ・飯田 (玉崎)
- ⑤ミュージカル『愛、時を越えて——遙かなる時空の運命』(岡山さと子 作・演出) 7月3日(土) 11:00～ 御園座
音楽：ボブ佐久間 美術：前田剛 振付：AYAKO 主演：紫吹淳、香寿たつき、山口馬木也 (磯貝)
- ⑥演劇創造αの会プロデュース『あなたがそう思うならそのとおり』(舞台美術デザインの島崎隆氏 追悼公演) 7月8日(木) 14:00～16:00 千種文化小劇場・ちくさ座
主演：末吉康司、広田和也、鳥居美江 (玉崎)
- ⑦子供のためのシェイクスピア・カンパニー『お気に召すまま』(山崎清介 脚本・演出) 8月7日(土) 13:00～ 愛知県芸術劇場小ホール
装置：松岡泉 衣装：三大寺志保美 主演：伊沢磨紀、福井貴一、大内めぐみ、山崎清介 (玉崎・服部・橋詰・磯貝)
- ⑧佐渡裕プロデュース・オペラ2010『キャンディード』(ロバート・カーセン 演出) 7月30日(土) 14:00～ 兵庫県立芸術文化センター・大ホール (玉崎)
- ⑨ミュージカル『ガイズ&ドールズ』(菅野こうめい 演出) 8月23日(月) 13:00～ 中日劇場 (1951年トニー賞5部門受賞、2009年再演) (玉崎)
- ⑩ミュージカル『春の目覚め』(マイケル・マイヤー 演出/浅利慶太 演出協力) 8月12日(木) 13:30～ ウィンク愛知小劇場 制作：劇団四季 (2007年トニー賞8部門受賞) (玉崎・磯貝)
- ⑪あいちトリエンナーレ2010プロデュース・オペラ『ホフマン物語』(栗國淳 演出) 9月18日(土)

14：00～ 愛知県芸術劇場大ホール

(服部・玉崎・磯野)

- ③②オリジナル・ミュージカル『海の向こうに』（西田直木 作・台本・作曲・演出） 9月20日(月・祝) 11：00～ 名古屋市青少年文化センター・アートピアホール

作曲・編曲・音楽監督：会田俊樹 指揮：小島岳志 振付：吉田潔 主演：園田裕史、川瀬邦成、落合健史、高見侑加 企画制作：名古屋市文化振興事業団 (玉崎)

- ③③『名古屋オペラ協会ガラ・コンサート2010』 9月17日(金) 18：30～ 愛知県芸術劇場コンサートホール (玉崎)

- ③④長久手オペラ・歌劇『セルセ』（原語上演） 10月3日(日) 長久手文化の家森のホール
芸術監督・演出・音楽指導・解説：大下くみこ (服部)

- ③⑤文楽・昼の部『仮名手本忠臣蔵』『釣女』&夜の部『曾根崎心中』 10月7日(木) (昼) 14：00～ (夜) 18：00～ 名古屋市芸術創造センター (磯貝・玉崎)

- ③⑥演劇『ヘッダ・ガーブレル』（宮田慶子 演出） 10月2日(土) 13：00～ 新国立劇場小劇場
翻訳：アンネ・ランデ・ペータス&長島確 主演：大地真央、益岡徹、七瀬なつみ (玉崎)

- ③⑦狂言とオペラ融合・音楽劇『Macbeth（マクベス）』（関根勝 演出） 10月11日(月・祝) 13：30～ 愛知県芸術劇場 コンサートホール
狂言×オペラ×和太鼓と銘打った公演だが、狂言に和太鼓とパイプオルガンの伴奏がつき、オペラ・アリアが混じる公演。 (玉崎・藤田)

- ③⑧四日市演劇鑑賞会例会・演劇『族譜』 10月2日(土) 昼公演 四日市市文化会館
原作：梶山季之 脚本・演出：ジェームス三木 (服部)

- ③⑨『受難劇』（クリスチャン・シュトゥックル 演出） 8月22日(日) オーバーアマガウ (酒井)

- ④⑩『ワンダフル・タウン』（荻田浩一 演出） 11月12日(金) 12：00～ 中日劇場
(1953年初演トニー賞5部門受賞。2003年再演キャスリーン・マーシャル振付賞受賞)
(玉崎・服部・橋詰)

- ④①歌舞伎『吉例顔見世』 10月2日(土)～26日(火) (昼) 11:00～ (夜) 14:15～ 御園座
 昼の部『旭輝黄金鯨』『汐汲』、夜の部『舞妓の花宴』『伽羅先代萩』『身替座禅』『弁天娘女男白浪』
 (磯貝)
- ④②演劇『わが町・名古屋』(久保明 演出) 10月21日(月・祝) 14:00～ 名古屋市青少年文化ホール・アートピアホール
 名古屋市民芸術祭 はせひろいち 作 舞台美術:伊藤三朗 照明:稲垣清行 音響:後藤佳子
 衣装:幅上智里 主演:西根智彦、亀山薫、内藤美佐子、坂本大作 (玉崎・服部・酒井・磯野)
- ④③静岡 SPAC『わが町』(今井朋彦 演出) 11月14日(日) 14:00～ 静岡芸術劇場
 音楽:松本泰幸 (服部)
- ④④『ブロードウェイ・ミュージカル・カンパニーJapan Tour・2010』 11月7日(土) 17:00～ 愛知県芸術劇場・大ホール
 音楽監督:ベルナール・マルシェ 振付:ティモシー・カスパー
 ツアーカンパニーであっても、日本の翻訳ミュージカルの水準をはるかに超えた公演であった。
 (玉崎)
- ④⑤愛知県立芸術大学オペラ『カルメン』日本語上演(飯塚励生 演出) 12月4日(土) 17:00～ 長久手文化の家森のホール
 指揮:佐藤正浩・愛知芸術大学管弦楽団&合唱団 舞台美術:愛知県立芸術大学日本画専攻プロジェクトリーダー松村公嗣 主演:杉浦愛美、佐藤文美 制作:愛知県立芸術大学・長久手文化の家
 (服部・磯貝・磯野・玉崎)
- ④⑥ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場オペラ『魔笛』(リシャルト・ベリット 演出) 11月30日(火) 18:30～ 愛知県芸術劇場・大ホール
 舞台美術:アンジェイ・サドフスキ (磯貝)
- ④⑦ミュージカル『RENT』(E. シュミット 演出) 12月15日(水) 13:00～ 中日劇場
 (1996初演・トニー賞3部門受賞) (玉崎)

II. 2010年全国上演作品（大きなトレンドを理解するための Our Selection）

(1) オペラ

月	劇場	作品名	演出家	指揮者	キャスト	制作団体	参照番号
1	愛知芸術劇場	椿姫	P・パニッツァ	B・チンクエグラーニ	マリエッラ・ディヴィーア	ドニゼッティ劇場	②
	東京文化会館	愛の妙薬	F・ペロット	S・モンタナリ	デジレ・ランカトーレ	ドニゼッティ劇場	
2	東京文化会館	オテロ	白井 晃	R.R. プリニョーリ	福井 敬、大山亜紀子	東京二期会	⑧
3	サントリーホール	望月京「パン屋の大襲撃」	栗國 淳	J. カリッケ	飯田みち代、高橋 淳	サントリー音楽財団	
	びわ湖ホール	ラ・ボエーム	A. ホモキ	沼尻竜典	澤畑恵美、望月哲也、宮本益光	神奈川・滋賀共同制作※1	
	サントリーホール	コジ・ファン・トゥッテ	G・ラヴィア	N・ルイゾッティ	セレーナ・ファルノッキア、ニーノ・スルグラージェ	サントリーホール	⑫
4	東京文化会館	パルジファル		ウルフ・シルマー	B. フリッツ、P. ローズ、M. シュスター	東京・春・音楽祭、東京オペラの森	
	いづみホール	ランスへの旅	岩田達宗	佐藤正浩	佐藤美枝子、井原秀人、久保田真澄、折江忠道	いづみホール	⑬
5	すみだトリフォニーホール	ペレアスとメリザンド	田尾下哲	C. アルミンク	藤村実穂子、M.F. ランセル	新日本フィルハーモニー	
6	東京文化会館	タンクレディ	松本重孝	アルベルト・ゼツダ	マリアンナ・ビッツォラート、高橋薫子、中井亮一	藤原歌劇団	
	新国立劇場	鹿鳴館	鶴山 仁	沼尻竜典	大倉由紀枝、黒田 博	新国立劇場※2	
7	兵庫芸術劇場	キャンディード	ロバート・カーセン	佐渡 裕	ジェレミー・フィンチ、マーニー・ブレッケンリッジ	兵庫県、兵庫県芸術文化センター	⑳
	東京文化会館	椿姫	ローラン・ベリ	J. ノセダ	ナタリー・デセイ	トリノ王立歌劇場	
	サントリーホール	売られた花嫁	L. スワロフスキー	L. スワロフスキー	M.A. コフトコヴァ	東京都交響楽団	
8	アステール・プラザ	カルメル会修道女の対話	岩田達宗	佐藤正浩	大城 薫、小島克正、乗松恵美	広島オペラ・ルネサンス	
9	愛知芸術劇場	ホフマン物語	栗國 淳	アッシャー・フィッシュ	アルトゥーロ・チャコン＝クルス、幸田浩子、砂川涼子、中嶋彰子、カルロ・コロンバーク	愛知県文化振興事業団・あいちトリエンナーレ、愛知芸術文化センター	㉑
	東京 NHK ホール	椿姫	リチャード・エア	A. パッパノー	A. ネットレプコ (A. ゲオルグユー代役)	英国ロイヤルオペラ	
10	びわ湖ホール	トリスタンとイゾルデ	M. ハイニケ	沼尻竜典	小山由美、ジョン C. ピアース	びわ湖ホール	
11	日生劇場	オルフェオとエウリディーチェ	高島 勲	広上淳一	手嶋真佐子、宮本益光、佐藤路子	日生劇場	
	愛知芸術劇場	魔笛	R. ベリット	ルベン・シルバー	A. プビッチ、T. クンツァ、T. ラク	ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場	㉒
12	新国立劇場	トリスタンとイゾルデ	D. マクヴィカー	大野和士	S. グールド、G. イェンティンス	新国立劇場※3	

※1：神奈川県民ホール

※2：世界初演

※3：新制作・尾高忠明

(2) ミュージカル

月	劇場	作品名	歌詞台本作家・作曲家	演出家	振付家 (or 装置)	音楽監督・指揮	主演	制作団体	参照番号
1	中日劇場	グレイ・ガーデンズ	台：D. ライト、 曲：S. フランケル、 歌詞：M. コリー	宮本亜門	岡 千絵 (振)、 方剛 (美術)	八幡 茂	大竹しのぶ、 草笛光子	東宝	①
	赤坂 ACT シアター	Talk Like Singing	台：三谷幸喜、 曲：小西康浩	三谷幸喜	原田薫 (振)、 堀尾幸男 (美術)	小西康浩	香取慎吾、 川平慈英	TBS・キョードー東京	
	東京・赤坂 ACT シアター	ファニー・ガール	台：I. レナード、歌詞：B. メリル、曲：J. スタイン	正塚晴彦	平澤 智	大田 健	春野寿美礼、 剣 幸	梅田芸術劇場	
2	東京国際フォーラム ホールC	カーテンズ	台：R. ホームズ 曲：J. カンダー、 歌詞：F. エップ	B. バーンズ & 菅野こうめい	B. バーンズ & 菅野こうめい (振)、島川と おる (装置)	清水恵介	東山紀之、 大和悠河、 鳳 蘭	Quaras	
3	中日劇場	レベッカ	台・歌詞：M. クンツェ、 曲：S. リーヴァイ	山田和也	伊藤保恵 (美術)	西野 淳	山口祐一郎、 大塚ちひろ、 シルビア・ クラブ & 涼 風真世	東宝※4	⑬
4	東京芸術劇場	サイド・ショウ	台・歌詞：B. ラッセル、 曲：H. クリーガー	板垣恭一	大澄賢也	宮崎 誠	貴城けい、 樹里咲穂、 岡幸二郎	フジテレビ ジョン	
	宝塚大劇場	スカーレット・ ピンパーネル	台・歌詞：ナン・ナイトン、 曲：F. ワイルドホーン	小池修一郎	御織ゆみ乃他 (振)、大橋泰 弘 (装置)	大田 健	霧矢大夢、 蒼乃夕妃	宝塚歌劇団	
5	愛知県芸術劇場	ザ・ミュージック・マン	曲・歌詞 & 台：メレディス・ ウィルソン	鈴木裕美	前田清美 (振)、 二村周作 (美術)	清水恵介	西川貴教、 彩乃かなみ、 植木 豪、 竹内都子	フジテレビ ジョン	⑳
	東京・ Bunkamura オー チャードホール	ドリームガールズ	歌詞：T. アイエン、 曲：H. クリーガー	R. ロングボトム	M. ベネット (振)、 R. ロングボトム (振)		M. アンジェ ラ、S. メル カード	来日公演 TBS/Lion※6	
6	梅田芸術劇場	絹の靴下	曲 & 歌詞：C. ポーター、 台：G.S. カウフマン他	荻田浩一	名倉加代子 (振)	玉麻尚一	湖月わたる、 今村ねずみ、 樹理咲穂	梅田芸術劇場	㉓
	赤坂 ACT シアター	CHICAGO	曲：J. カンダー、 歌詞：F. エップ	B. フォッシー (M. キング)	B. フォッシー (G. クリスト)	上垣 聡	ライト、J. ダ ン、米倉涼子、 河村隆一	TBS/キョードー東京※5	
	東京・帝国劇場	キャンディード	台：J. ケアード、 曲：L. バーンスタイン	J. ケアード	広崎うらん (振)、ユン・ ベ (装置・原 案：J. ネビア)	塩田明弘	市川正親、 井上芳雄、 新妻聖子	東宝	
8	東京・帝国劇場	エリザベート	台・歌詞：M. クンツェ、 曲：S. リーヴァイ	小池修一郎	島崎 徹ほか (振)	甲斐正人	朝海ひかる、 瀬奈じゅん	東宝	
	ウインク愛知	春のめざめ	原：ヴェデキント、台： 歌詞：S. セイター、曲： S. シーク	M. メイヤー	B.T. ジョーン ズ (振) C. ジョーンズ (装)	K. グリッ グスビー	上川和哉、 林 香純	劇団四季※7	
	中日劇場	ガイズ & ドールズ	曲 & 歌詞：F. レッサー、 脚：J. スワウリング & A. パロウズ	菅野こうめい	上島雪夫 (振)、 二村周作 (美術)	長谷川雄大	内 博貴、 笹森玲奈、 錦織一清、 高橋由美子	東宝	㉔
9	東京・青山円形劇場	今の私をカバン につめて	歌詞・台：G. クライヤー、 曲：N. フォード、翻訳・ 上演台本：三谷幸喜	G2	植木 豪 (振)	千葉一樹	戸田恵子、 石黒 賢	ネルケプラン ニング	
10	東京・青山劇場	バル・ジョーイ Pal Joey	歌詞：L. ハート、 曲：R. ロジャーズ	吉川 徹	R. ビークマン	清水恵介	坂元昌行、 高畑淳子	Quaras	
11	中日劇場	ワンダフル・タ ウン	歌詞：B. コムデン & A. グリーン、曲：L. バ ーンスタイン	荻田浩一	原田薫 & 港ゆ りか (振)	島 健	安蘭けい、 大和和美帆、 別所哲也	テレビ朝日、 梅田芸術劇場	㉕
	東京・銀河劇場	FAME フェーム	台：J. フェルナンデス、 歌詞：J. レヴィ、曲： S. マーゴシェ、日本語 台本：西田直木	西田直木	吉田潔・阿部 雅浩 (振)	田中詞崇	前田美波里、 吉田要士、 中村香織	スイセイ ミュージカル	
12	中日劇場	RENT	曲 & 歌詞：J. ラーソン	E. シュミット	辻本知彦 (振)	佐藤真吾	福士誠治、 Anis、中島卓 偉、ソニン	東宝	㉖
	東京・ル・テ アトル銀座	COCO ココ	脚・歌詞：A.J. ラー ナー、曲：A. プレヴィン	G2	前田清美 (振)	荻野清子	鳳 蘭、彩吹 真央、岡幸 二郎	Quaras※8	

※4：東京・帝劇/4月から ※5：NY 俳優・スタッフとの共演・英語交じりの公演 ※6：米2009新プロダクション・キャスト & ス
タッフの参加5/19～6/5 ※7：2009初演の全国ツアー ※8：2009 best musical の再演

III. 2010オペラ Musical 公演評

(1) 2010年のオペラ上演の動向

2010年には世界に冠たる英国ロイヤル・オペラの他に、海外から7歌劇場が引越し公演を行った。その他に、ドミンゴ指揮アレーナ・ディ・ヴェローナによる『アイーダ』公演があった。その中で最高の評価を得たのは、トリノ王立劇場の『椿姫』公演で、芝居上手なナタリー・デセイの演じる新しい椿姫であった。だが、同じ『椿姫』のマリエッラ・ディヴィーアのベルカントの名唱（ドニゼッティ劇場）や、ロイヤル・オペラの代役でのネトレプコの名演も忘れてはならない。海外の一流歌手が来日する今、実は有名歌劇場の名前よりは、歌手や音楽の名演奏こそが決め手と言える。

2010年日本では海外公演も含め、ほぼ150演目、全体で400ちかくのオペラ公演が行われた。その中でまず新国立劇場と公共ホールによる注目すべき公演をいくつかあげたい。

尾高忠明新芸術監督の下での新国立新制作公演『トリスタンとイゾルデ』は大野和士指揮とマクヴィカーの演出に海外と日本の一流歌手の名演で期待通り高水準であった。兵庫県芸術文化センターのオペラ『キャンディード』公演は、シャトレ座と他の2歌劇場の共同制作プロダクションを用いたロバート・カーセンの演出に、佐渡裕指揮による日本のオケと合唱とが相まって斬新な公演となり、年間最高の公演とおす評者も多い。びわ湖ホールの芸術監督沼尻竜典による『トリスタンとイゾルデ』は、演出・舞台はドイツ、ケムニッツ劇場の協力を得て主役ピアース以外日本人歌手で、イゾルデの小山由美も高く評価され名演だった。愛知県芸術劇場での愛知トリエンナーレ2010『ホフマン物語』公演は、主要歌手2人以外は日本人歌手であり、栗國淳演出を始め日本人が主の新プロダクションで劇場機構をフルに活用した豪華な舞台もあって国際的水準と評された。ひろしまオペラルネッサンス『カルメル会修道女の対話』（佐藤正浩指揮・岩田達宗演出）は、地方においては珍しい演目をオーディションによる日本人歌手が歌っての成功であった。必ずしも海外の有名歌劇場引越し公演でなくとも、公共ホールで高水準の公演が行われている。こうした地方の公共ホールの努力を見ると最高の条件に恵まれた新国立にさらに一層の努力を要望したい。しかし新国立の三島由紀夫原作『鹿鳴館』のオペラ化は、鶴山仁台本と池辺晋一郎作曲による優れた日本オペラの新作初演で意義深いものであった。公共ホールではないがサントリー財団による望月京作曲『パン屋の大襲撃』（栗國淳演出・ヨハネス・カリッケ指揮）も優れた新作日本オペラであった。

歌劇団の公演としては、東京二期会の『オテロ』公演はなにより演出家白井晃の演劇的に練られた演出ゆえに評判となったが、ブリニョーリ指揮と二期会歌手の歌唱で音楽的にも優れた公演となった。藤原歌劇団の『タンクレディ』（松本重孝演出）も同様に指揮者アルベルト・ゼッダを得て、主役はピッツォラート以外藤原歌劇団の優れたロッシーニ歌いの日本人歌手陣による名演だった。藤原歌劇団も二期会も、目新しい演目で新国立より常に安定した水準の公演で、観劇意欲を呼ぶ。

財団によるオペラ公演では、国際的な演出者・指揮者に率いられた若い力量ある歌手によるホール・オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』はサントリー音楽財団の新制作で、ラヴィーア演出・ルイ

ゾッティ指揮により優れた公演であった。サントリーホールはコンサートホールでありながら、オペラ公演にも意欲的である。さらに日生劇場の NISSAY OPERA 『オルフェオとエウリディーチェ』も魅力的な日本人歌手の演奏で高水準だった。日生劇場（ニッセイ文化振興財団）については、ファミリー・オペラの上演、オペラ教室、学校単位の招待公演（名作劇場）など、次世代の観客に向けての優れた企画をも評価したい。

各交響楽団の演奏会形式オペラとして、チェコからの4歌手を迎えたレオシュ・スワロフスキーの演出・指揮による東京交響楽団の『売られた花嫁』は本格的チェコ・オペラを見せた。他にウルフ・シルマー指揮・NHK 交響楽団の演奏会形式・東京オペラの森『パルジファル』公演、新日本フィルハーモニー交響楽団クリスティアン・アルミンク指揮『ペレアスとメリザンド』（藤村実穂子主演）が注目すべき公演であった。

新国立劇場中・小ホールでの実験的オペラには、『マダム・サン・ジュスト』、『シラノ・ド・ベルジュラック』、札幌室内歌劇場の『月を盗んだ話』があった。小ホールでのスタッフ・キャスト共日本人のみによる質の高い公演として、いずみホールの『ランスへの旅』をあげたい。これは再演ではあるが、それぞれの歌手の優れた歌唱力を引き出した指揮佐藤正浩とコンサートホールという空間を十分に生かした岩田達宗演出によって見ごたえ聴きごたえのある名演であった。また、東京文化会館小ホールの『奥様女中』、東京室内歌劇場の『ラ・カリスト』など、めったに上演されない演目が、小ホールで公演された。他に神奈川県立音楽堂の『アーサー王』は海外からのキャストによる1幕の演奏会形式上演であった。また愛知県長久手文化の家ではレクチャーつきで珍しい演目の演奏会形式公演を続けており（長久手オペラ『セルセ』主宰大下くみこ）、地方ホールの試みとして評価したい。

最後に注目すべき公演として、国内の複数の歌劇場による共同制作公演、びわ湖ホール&神奈川県民ホール、東京二期会共催の『ラ・ボエーム』があった。舞台は2008年ベルリン・コーミッシェ・オパーの制作によるホモキ演出であるが、日本人歌手中心で指揮沼尻竜典により十分に優れた公演を行えることを示した。地方自治体の緊縮財政から、また文化庁の共同制作に対する規制の緩和により、こうした公演が増えるのは歓迎である。共同制作の欠点としては、有名オペラに演目が偏ることだが、中・小ホールの演奏会形式上演は、演出家の優れたコンセプトと優れた音楽性ある指揮者により、珍しいオペラの質の高い公演が期待できる。今後もこうした共同制作や演奏会形式上演により、優れたオペラ上演を展開してほしい。（玉崎・服部記）

(2) 2010年のミュージカル上演の動向

2010年のブロードウェイからの来日公演は3作で、『ドリームガールズ』はブラック・ミュージックの血がたぎる見事な歌とダンスであった。ラテン音楽とラップを多用した移民たちの群像劇『イン・ザ・ハイツ』も人形劇の手法を取り入れた『アヴェニューQ』もそれぞれ新しい趣向が注目された。それに比して、2010年の日本でのミュージカル翻訳公演は、ごく少数の新作初演があったものの、大半が最近NYで再演された名作舞台を翻案したものであった。その中で『シカゴ』再演は、本場のオリジナル・キャストを二人交えたことにより日本人俳優の歌とダンスのレベルを飛躍的にあ

げ、画期的な公演となった。

劇団四季は、『キャッツ』(1983年)以降プロダクションの上演権を買い、英米公演の演出家の指導を仰いだ、いわばコピー上演で成長してきた。チケット・ぴあ販売により飛躍的に観客を増加させ、全国に8専用劇場を擁するまでになり、常に全国5劇場でロングラン公演を続けている。こうして、2009年東京初演の『アイダ』と『春のめざめ』が月刊『ミュージカル』誌の年間ベストテンの2位と4位にランクされた。2010年に開幕したロンドン新制作の『サウンド・オブ・ミュージック』も高位にランクされるであろう。

1963年の日本人キャストによる初の翻訳ミュージカル公演『マイ・フェア・レディ』は、有名スターを中心に据える東宝ミュージカルの公演形態を生んだ。そうした形での2010年の優れた公演は、鳳蘭主演で演劇畑の演出家G2による『COCO』の再演である(フジTV系列Quaras制作)。だが現在、帝劇における東宝の看板公演は『レ・ミゼラブル』や『ミス・サイゴン』など舞台装置に凝った超大作であり、四季と同様本場の演出指導を仰ぐ舞台である。2010年は『エリザベート』と『モーツァルト』の3ヶ月公演が大作再演で、次に東宝はジョン・ケアード演出で彼の改訂版台本による『キャンディード』に力を入れたが、ドラマは好評だったが、音楽面で兵庫公演と比較にならなかった。1956年初演の『キャンディード』も含め、『キャバレー』、『ファニー・ガール』、『ザ・ミュージックマン』、『絹の靴下』、『ガイズ&ドールズ』、『パル・ジョーイ』、『ワンダフルタウン』といった1950年代の名作が、この1年数多く上演された。この他に『ドリームガールズ』の作者クリーガーによる『サイドショウ』、『エリザベート』の作者によるクンツェ&リーヴァイ作の大劇場版『レベッカ』が日本初演された。こうした演目には、制作側の安全策をとる意図が明らかである。同様の商業的狙いから、これらの翻訳ミュージカルには、客寄せとしてプロではない有名タレントが起用されることも多く、1ヶ月毎の新作公演に合わせ、1ヶ月程度の稽古という状況で、公演の質がとうてい本場にかなわない。この中で『パル・ジョーイ』は通常のミュージカルとは一味違う魅力を示し、『絹の靴下』は名倉加代子振付による優れたダンス・ミュージカルだった。日本初演の『絹の靴下』、さらに『ファニー・ガール』など梅田芸術劇場の企画制作を高く評価したい。新国立に招かれた『ザ・ミュージックマン』(制作フジTV)は、ブロードウェイらしい楽しさを観客に伝えた。『ガイズ&ドールズ』は喜劇性を重視した菅野こうめい演出は優れていたが、主役タレントが主人公を演じきれていなかった。舞台でのミュージカル歌唱には声楽的訓練が必要である。

2007年ブロードウェイ初演の『カーテンズ』日本初演は、カンダー&エプの名曲に加えキャストにも恵まれ好評だった。

宝塚は独自の路線でオリジナルのミュージカルとレビューを上演し、日本のミュージカルをある意味でリードし、また優れたミュージカル女優を供給している。2008年初演『スカーレット・ピンパーネル』は、日本人好みの作曲家ワイルドホーンの作だけに、翻訳ミュージカルのヒットとなった。

こうした翻訳ミュージカルとは別に、オリジナル・ミュージカル公演がある。まず2010年新作として、「鉄腕アトム」をミュージカル化した『アトム』のわらび座公演があった。そのほかミュージカル座『ひめゆり』や、スイセイ・ミュージカル『楽園 The Musical』、音楽座ミュージカル『シャ

ボン玉とんだ宇宙までとんだ』などの創作ミュージカルが再演された。劇団四季も多くの優れた子供むけオリジナル作品をもち、2010年には『はだかの王様』、『エルコスの祈り』などの再演が全国巡演された。

2010年には劇団☆新感線企画制作のオリジナル・ミュージカル『薔薇とサムライ』（新作）が大人気であった。謝珠栄が主宰するTSミュージカル・ファウンデーションの『天翔ける風に』（2001年初演）も優れた作品で、再演再々演が続く。劇団ではないがミュージカル好きな三谷幸喜作・演出の新作『TALK LIKE SINGING』（作曲：小西康陽）がニューヨークと日本で上演された。

ほかにストレート・プレイながら、結果的には音楽が重要な構成要素になっている名作『上海パンスキング』が16年振りに再演された。斎藤麟の優れた脚本と、俳優の演じるジャズメンたちが実際に演奏するという形で挿入されたミュージカル・ナンバーが名曲揃いで、感動させる名作上演となった。2009年初演で、小曽根真にミュージカル音楽賞が授与された井上ひさしの『組曲虐殺』も、井上ひさし作らしく音楽が重要であった。演劇における音楽はますます重要性を増してきている。

最後に、2010年は名古屋市開府400年のため名古屋市と市文化振興事業団の企画制作によりオリジナル・ミュージカル『海の向こうに』が上演された。キャストはオーディションによって選ばれた素人・プロの混成で、スイセイ・ミュージカルの西田直木に脚本・作曲・演出をえて、歌唱・ダンスにおいて注目すべき舞台となった。同様に市民・プロ混成キャストの『チャルダッシュの女王』も開府400年記念事業の一つで、斎藤一郎が見事な指揮でまとめて祝祭的舞台を見せてくれた。こうした全国に見られる市民ミュージカルの企画制作は、創作ミュージカルの底上げに貢献している。

日本人による創作ミュージカル制作の円熟・発展こそが、ミュージカルの未来を担っている。幸い、オペラ観客の高齢化と比べミュージカル好きな若い観客と、ミュージカル俳優を志す若者の増加があつて、将来に希望がもてる。制作側にも、単なる客寄せに走らず、音楽的に質の高いミュージカル公演に一層の努力を期待したい。

（玉崎・服部記）

IV. 短評選

観劇した作品についての短評をいくつか紹介する。

番号は「I. アート・クリティック2010年に報告された観劇演目リスト」の参照番号である。

③演劇・エドワード・ボンドの『リア』 12月23日(水) 公演 びわ湖ホール・中ホール

「われわれはいかにこの現代を生き抜いていくべきか」この重い問いかけを行う「串田和美+白井晃プロジェクト第4弾」として、シアタートラム、松本市市民芸術館、びわ湖ホールで上演された『リア』の舞台を、びわ湖ホールで観た。「もう一つのリア王伝説!」とあるので、何の予備知識もなく翻案ものだろうと思っていた。第1幕が終わった時点であまりにも怖かったので、「ここで帰ろう」という気持ちが一瞬、頭をよぎった。

客席に座って目にした光景はさながら工事現場である。三方が張り出した舞台上に鉄板、H鋼、一斗缶、工事現場のシートなどが置かれ、足場が組んである。串田和美演じるリアは敵から国を守るため若い頃より壁を築いているが、未だ完成しない。工事現場で事故は日常である。理不尽な暴力と肅正の殺人も日常である。三方から登場する軍服を着た役者たちが、ときに整然とときに暴走気味に銃を構え殺し合う。非人間的な医療現場の医者や権力に迎合するだけの官僚も登場する。目と耳を覆いたくなるような恐ろしくグロテスクな舞台であった。

二人の娘との戦いに敗れたリアは、やさしい墓堀の息子とその妻コーディリアに森で助けられる。墓堀の息子は兵士たちに殺された後、舞台上に亡霊となって両目をえぐられたリアに付き添う。彼はシェイクスピア作『リア王』の「哀れなトム」を演じるエドガーに、リアはグロスターに幾分重なっている。一方、コーディリアは兵士たちにレイプされるが、この哀れな犠牲者は、正義の革命家を経て権力者にまで上り詰め、再び壁を築き始める。

いつになっても完成しない建設中の壁は、様々な交わりや進行を妨げる障壁のメタファーであろう。世界は愚行の繰り返しと不調和に満ち、人と人との繋がりは断たれている。舞台空間では鋼材や一斗缶を叩く音、叫び声、銃声、軍靴音などが不気味に響き、鉄線を擦り合わせて奏でられる、朝比奈尚行による調性の定まらぬ音楽と相俟って、劇効果を高めていた。暗転のない舞台では場面進行が建設現場の進行を表すボード上に順次書かれ、一種の異化効果を担っている。予定調和で終わらない劇世界が、演出家によってどこまで計算されているのか不明な演技と偶然性の音楽とによって即物的に構築されている。墓堀の息子・亡霊を演じた水橋研二が無垢な青年の存在感のなさを表し、印象に残った。

ボンドは即物的な舞台設定で人間の暴力を示すことによって人間性を描こうとした。彼自身による序文によれば、「暴力がなくならない限り人間には未来はない」からである。彼は1934年の生まれで、この作品はシェイクスピアが英米でも政治的に受容され始めた頃、1971年にロンドンで初演されている。ちなみにコットが『シェイクスピアは我らの同時代人』で歴史劇に東欧の全体主義の恐怖を見

抜いたのは1964年。劇の終わり近くでリアはかつての過ちを悟り、壁を壊しに出かけるが、逆に撃たれ足場から落ちて死ぬ。世界は結局変わらず、人々は希望を持ってないのか、その疑問を客席に投げかけて舞台は終わる。

「もうひとつのリア王伝説」と銘打たれていたのが分かった気がした。ポンドの示す世界観では、『リア王』はこのように語り直されるのである。二度と観たくはないが、今後シェイクスピアの『リア王』を観るとき必ず思い出す芝居となるであろう。(服部 記)

⑧ヴェルディ『オテロ』東京二期会オペラ劇 2月20日(土) 東京文化会館大ホール

昨年12月びわ湖ホールの『リア』に続き、白井晃の演出による、しかも、シェイクスピア関連の舞台である。白井は二期会のオペラ初演出である。

アリゴ・ボーイト台本、ジュゼッペ・ヴェルディ作曲の『オテロ』は、シェイクスピアの『オセロ』を下敷きにしているが、ヴェニスの場面がカットされ、舞台設定はすべてキプロス島となっている。舞台装置はシンプルで、舞台奥が高くなるように大きな白い斜面が造られている。場面に応じて紗のスクリーンと、白い柱と影、大きな赤い幕でアクセントがつけられ、うごめく欲望や嫉妬が表象されている。

ヴェルディのオペラといえば強い声を持つ歌手をつい想像してしまいがちである。今回ムーアの將軍オテロ役の福井敬は、現在日本を代表するテノール歌手であるが、特に強い声を持っているわけではない。第1幕登場の場面ではオテロとして物足りない気もしたが、恋人役から嫉妬に狂っていく内面をよく表していた。また、大島幾雄によるヤーゴはオテロに破滅をもたらす大悪人には見えない。男性歌手陣が軽めの声である一方で、デスデモーナ役の大山亜紀子は美しいのびのあるソプラノで従来のヴェルディのデスデモーナのイメージに合っている。

第3幕ヤーゴとカッシオの会話をオテロがのぞき見る場面は、芝居としても印象的であった。また、終幕でオテロは自らを刺した後、無実の罪で死んでいった妻に再度口づけを求め手を伸ばそうとする。二人が折り重なって死ぬ演出もあるが、この舞台では手ですら届かず、天国での再会は暗示されていない。配役上の微妙なミスマッチや、細部の演出が象徴的な舞台においては悲劇性を高めているように感じられ、演出家が演劇畑出身であることを意識させられた。

東京都交響楽団の演奏も歌に寄り添ってすばらしかったが、東京文化会館の空間もこのオペラを楽しむにはよかったかもしれない。(服部 記)

⑦子供のためのシェイクスピア・カンパニー『お気に召すまま』(小田島雄志翻訳 脚本・演出：山崎清介) 8月7日(土) 13:00~15:20 愛知県芸術劇場小ホール

1995年から始まったシリーズの16作目で、毎年夏休み中の楽しみにしている舞台である。「子供のための」とは、シェイクスピア作品を子供にもわかりやすくアレンジしたというくらいの意味で、決して子供向きということではない。舞台セットは、木製の椅子と机のみ。黄色のヘルメットと黒マント姿の役者たちが黒子のようにそれらを並べ替え、クラップ(拍手)と「シュッシュッ」というコー

ラスで舞台上で隊列を組み、場面を転換していく。さらに、山崎の腹話術による人形遣いなど、演出の様式化されたスタイルは、今回も採用されている。

開演15分前には、会場に入る。役者たちのちょっとしたおしゃべりと歌で構成される開幕前の「黒マントショー」を見るためである。このショーは、もちろん、プログラムのどこにも記されていない。しかし、早くから着席している観客が多かったのは、これが、おなじみとなっているからであろう。固定ファンがかなり存在するように見受けられた。『お気に召すまま』は、牧歌劇の伝統に属す喜劇で、宮廷 vs. 田園、貴族 vs. 庶民、人工 vs. 自然など様々な対立が、エピソードの連続／不連続で膨らまされ、最後の結婚の成立によって解消される芝居である。アーデンの森を中心に置きたいわばイギリス的な対立は、この舞台では十分に描かれていなかった。その代わりかどうかは不明だが、レスリングの試合は相撲の試合に変えられ、時事ネタや風刺ネタが満載で、特に大人の観客たちに受けていた。ドタバタの笑いと恋愛ゲームの混乱を回収するのが、伊沢磨紀の演ずる皮肉屋ジェークイズである。彼女は、異性装であることを不問にするほどの卓越した演技で存在感があった。

従来の子供のためのシェイクスピアシリーズでは、工事現場のお昼ご飯風景が幕間劇（インターロード）のように演じられてきたが、今回の上演では、それがなかった。また、場面展開に目の覚めるようなインパクトを若干欠いていたようにも感じられた。スタイルの様式化は観客の期待感を高める一方で、マンネリズムに陥る危険性もある。来年は『冬物語』を上演する予定であるという。様式を追求しながら新たな地平を開く上演となることを期待したい。（服部 記）

③ 『ホフマン物語』 9月20日(月・祝) 14:00～ 愛知県芸術劇場大ホール

国際芸術祭「あいちトリエンナーレ 2010」の一環として、9月18(土)、20日(月・祝)、愛知県芸術劇場大ホールにおいて、オフエンバックのオペラ『ホフマン物語』が上演された。

主催：あいちトリエンナーレ実行委員会 財団法人愛知県文化振興事業団 愛知芸術文化センター

助成：財団法人地域創造 財団法人三菱 UFJ 信託芸術文化財団 社団法人私的録音補償金管理協会

指揮：アッシャー・フィッシュ

管弦楽：名古屋フィルハーモニー交響楽団

合唱：AC 合唱団

演出：栗國 淳

出演：アルトゥーロ・チャコン＝クルス（ホフマン）、加賀ひとみ（ミューズ／ニクラウス）、カルロ・コロンバーラ（リンドルフ／コッペリウス／ミラクル博士／ダペルトウット）、幸田浩子（オランピア）、砂川涼子（アントニア）、中嶋彰子（ジュリエッタ）、その他。

構成：プロローグ、第1幕（オランピア）、第2幕（アントニア）、第3幕（ジュリエッタ）、エピソードの5幕仕立て。

以下、観劇の感想をメモ風に記す。

役の配分については、外国人歌手と日本人歌手との混成であったが、よくあるように、主役を外国人歌手、端役を日本人歌手とせず、適正な役の配分であった。

オペラを鑑賞している間中、ホフマンと3人の女との関連に気を配っていた。DVDで予習をしていったので、物語の進行はよくわかったが、問題は、ホフマンの恋の3つのタイプをどのように考えるかであった。

第1話のオランピアは人形なので、男の「ピグマリオン願望」、第2話のアントニアはその脆弱さが強調されているので、「椿姫願望」、第3話はその悪女ぶりが強調されているので、「ファム・ファタール願望」を表し、これら3話でもってロマン派時代に男の恋する女の典型（人形のように男の言うまになり、脆弱で、悪女っぽさを持つ女）をユーモラスに表現したものと思われる。それら3人の女の特徴は現実にはホフマンが恋人ステラに求める特徴を示すが、彼女はホフマンの愛を受け入れることなく退場する。失恋したホフマンは詩作に心の癒しを求める。

なお、このホフマン物語の進行の裏に『ドン・ジョヴァンニ』という同じく失恋物語が同時に進行し、メタ・ドラマの構造をもっていることに注意したい。この構造も、ホフマンの物語を〈異化〉する働きを持つ。（磯野 記）

③4 歌劇・G. F. ヘンデル作曲『セルセ』抜粋（原語上演・解説付き） 10月3日(日) 主催：長久手町教育委員会 長久手町文化の家 森のホール

長久手オペラは、大下くみこ氏の芸術監督・演出・音楽指導によって、原語上演にこだわり、場面と場面を日本語の解説でつなげるスタイルで上演されてきた。19回目の開催となる今回初めて、バロックオペラを取り上げた。「オンブラマイフ」（ラルゴ）で有名なヘンデルの『セルセ』は、ペルシャ王セルセ（クセルクセス）の気まぐれな恋と、女性を巡る弟との争いを描いた話である。

上演チラシが美しい。木陰にたたずむペルシャ王らしき人物のシルエットがベルシアンブルーで描かれ、イスラム文様の額縁がつけられている。背景には金色のアラビア文字。囲まれた庭、緑陰とイスラム情緒が、遠い異国の恋物語への興味をそそった。

装置は、舞台上にプラタナスの木が一本あるのみ。木陰で物思いに沈む恋人の図像は、ルネサンス以来恋に悩む青年の常套モチーフである。緑豊かな空間で恋は生まれるが、ここでは、その恋の行方を見守るのも木の役割である。シンプルな舞台であるが故に、物語の中で木の果たしている象徴的な役割が確認できたように感じられた。

バロックオペラに特徴的なこととして、登場人物はダ・カーポアリアを繰り返し歌う。セルセ王とその弟アルサメーネ、アリオダンテは愛知県立芸術大学大学院在学中の若手テノールが演じた。セルセとアルサメーネ役の演技はまだ堅かったが、歌唱がすばらしかった。一方、他の出演者たちは、演技で若手を支えていた。特に、エルヴィーロ役の中野嘉章は芸達者なところを見せ客席を大いに沸かせた。ピアノ演奏も熱演であった。珍しいオペラ作品を含めて19回も上演を続けてきた現在、実力派の歌手のみならず、長久手オペラのファンも確実に育ってきていると言えるだろう。空席が若干目立ったのは、少し残念だったが、マイナーなオペラでは仕方ないのかもしれない。（服部 記）

③⑧演劇『族譜』(梶山季之=原作 ジェームス三木=脚本・演出) 10月2日(土) 公演 四日市市民文化会館

「族譜」とは、中国・朝鮮半島における父系血縁集団である宗族が、系図(世系)を中心に 重要な人物の事績、重要な事件、あるいは家訓などを記載した文書である。青年劇場の『族譜』は昭和15年、朝鮮・水原(スウォン)郡を舞台に日本政府による「創氏改名」「皇民化政策」の真実や国家と文化のありようを問うものである。

「創氏改名」政策の任にあたっている谷六郎は、改名を拒んでいる地主・薛鎮永(ソルデニョン)の説得にあたるが、薛は、「族譜」を谷に見せ改名に応じることとはできないと語る。谷は、善意のつもりで日本名を提案する。薛は、提案された日本名で改名届けをしたその日、自ら命を絶ち、「族譜」にも終止符が打たれる。

朝鮮半島の伝統的な地主の家を中心に展開するこの芝居は、当時交わされたであろう会話の丁寧な再現を通して、支配した側と支配された側の意識の違いを示し、支配者の言葉と権力、言葉とアイデンティティ、国家と文化、歴史と語りなどの様々な関係について観客にあれこれ考えさせた。

四日市演劇鑑賞会 月例会の上演で、年配の女性たちが客席に多数いたが、観客はかなり集中していたようだ。劇が進行するにつれて会場全体が凍り付いていくような感覚を覚えたのである。現在の「平和な」日本の日常生活の中で忘れられがちな意識、感覚を覚ましたと言えるだろう。これは演劇が本来持っている力の一つでもある。後日鑑賞会事務局に聞いたところ、芝居の感想は「良い」と「悪い」との真っ二つに分かれたそうである。このような芝居を観るのも良いものだ。(服部 記)

③⑨『受難劇』2010 8月22日(日) 上演 オーバーアマガウ

南ドイツ、バイエルン地方の小さな村オーバーアマガウ。人口5000人のこの村へ、世界中からおおよそ50万の人々が、10年ごとに上演されるキリストの『受難劇』を見にやってくる。『受難劇』は世界のいたるところで現在も上演されている。イギリスでカンタベリー大聖堂、ロンドンのサザーク教会、コベントリーの大聖堂などで何度か見たことがある。オーバーアマガウの『受難劇』はこれまでの経験をはるかに超えた新しいものであった。

この村でなぜ『受難劇』が上演されるようになったのか。事の起こりはこうである。30年戦争(1618~1648)当時、ヨーロッパでペストが猛威を振るった。この村にも多くの犠牲者がでた。村人たちはそれ以上ペストの犠牲者を出さないために、「われらが主イエス・キリストの苦難と死、復活の劇」を10年に一度上演するという誓いを立て、1634年の精霊降臨祭のとき、初めてその誓いを実行した。オーバーアマガウは古くから「木彫り細工」の村として有名であった。「木彫り細工」の行商人を通してこの「劇」の噂が広く伝わることになる。1680年からは、最後の数字が0となる年を上演年とするようになり、1934年の特別公演をはさんで、今回は第41回目の公演となった。5月15日に始まり10月3日まで102回上演された。

今回の演出はクリスチャン・シュトゥックル。彼はザルツブルグでも活躍中の舞台(オペラ)演出

家で、1990年から連続3回目の演出である。この劇の出演者、演奏家、コーラスはすべて、オーバーアマガウの出身者か20年以上の居住者でなければならないが、彼もこの村の出身者である。出演者は総勢2500人（内450人は子供；イエス、母マリア、マグダラのマリアなど主だった役はダブル・キャスト）、オーケストラは110人、コーラス110人、村を挙げての大イベントである。村役場は上演の2年前に5000人の住人に対してどの役を演じたいかのアンケート調査をおこなう。家族で一緒に舞台に立ちたいとの理由から群衆役を希望するものもいるという。今回の最高齢者は94歳である。舞台には馬、羊、駱駝、鳩も登場する。前年の4月にキャストを決定し、11月からリハーサルに入る。同4月からチケットの予約が始まるが、完売という。上映時間は第一部が2時30分から5時15分、約3時間の休憩を挟んで、第二部が夜8時から10時30分まで、合計5時間15分におよぶ。1634年の第1回の公演は、ペストで亡くなった人々が眠る墓地に作った舞台の上でおこなわれた。その後、17世紀、18世紀は、木製の骨格のみの舞台上演されたが、1830年に現在の場所に劇場が建てられ、その後何度か改修されて、現在使用されている劇場は収容人数4700人の大劇場となった。観客席には天井があるが、舞台部分は青天井である。舞台背後には青空が顔を覗かせる。舞台幅は70メートル。大舞台の上に、時に、1000人ももの群衆が登場する。

オーバーアマガウの『受難劇』はこれまでイギリスで見た『受難劇』とはスケールが違うが、もちろんそれだけではない。劇全体のおおよそ3分の1はローカス・デドラー（1779～1822）作曲の音楽の演奏とコーラスとが占める、いわば音楽劇になっている。この音楽とコーラスがすばらしい。全体は、さながらオペラのように序曲に始まって、イエスのエルサレム入城から復活まで11幕が続く。それぞれの幕では、最初に序詞役（プロローグ）1名とコーラス48名とが登場し、旧約聖書と旧約聖書に基づく内容の詩を歌い、そのあと、内舞台の扉が開くと、そこに旧約に基づく活人画（Tableaux Vivants）が現れる。1分ほどで扉が閉じられ、そのあとに新約に基づくイエスの受難が演じられていく。この活人画は1750年にフェルディナンド・ロスナー（1709～1778）がはじめて採用したものだが、ロスナーは、それぞれの幕で演じられるイエスの受難を予表する旧約の出来事を活人画によって観客に示し、イエスの受難の意味を観客たちに深く考えさせようとしたという。彼はこの活人画を瞑想（meditations）と呼んだ。たとえば、第二幕では、モーゼがユダヤの民を導いて紅海を渡る場面が活人画で示され、そのあと、イエスが教えを説きながら人々を導いていく様が演じられる。第四幕では、最後の晩餐が演じられるのに先立って、活人画によって出エジプト直前の過ぎ越しの祭の宴の場が示される。第十幕では、イサクの犠牲の活人画のあと、イエスの磔刑が演じられるといった具合である。

イエスを演じる役者をはじめ、出演者は全員素人の住民たちなのだが、長時間にわたる訓練の賜物であろう、彼らの演技は素人とは思われぬできばえであった。演出の上でも、いくつか気づいたことがある。前回までは、記録によると、午前中と、昼の休憩を挟んで、午後には上演されていたので、白昼の明かりの中での上演であったが、今回は、第二幕が薄暮から夜にかけて上演されたので、これまではなかった効果が生まれたのではなかろうか。特にイエスが十字架にかけられた時、空は真っ暗になったと聖書の記述にあるので、今回のほうが演出的には効果があったと思われる。これまでの上

演をみていないので、比較はできないが、面白いことに、聖書ではイエスの復活をマグダラのマリアたちに墓の前で知らせる「み使い」が、ユダがイエスを裏切るあたりから、最後イエスが復活し舞台を退場するまで、常に舞台上にいて、そこで起きることの一切を見届けていた。恐らくは今回の新しい演出だと思われる。

上に触れた1934年の特別公演とは、ヒトラー、ゲッベルスによる要請公演のことである。ヒトラーらは、イエスを殺したのはユダヤ人であるとして、この『受難劇』を自らの反ユダヤ主義政策に利用しようとした。一方、ユダヤ人、とりわけアメリカユダヤ人協会は、この『受難劇』を反ユダヤ的であるとして非難し、作品の解釈変更や、さらには、せりふの削除などを求めた。純粋な気持ちから始まったオーバーアマガウの住民の『受難劇』が受けてきた受難である。

このような思いをめぐらせながら、目の前に展開されるイエスの受難をテーマにした「劇」を見ていたのであるが、いつしか、「劇」を観ているのではなく、イエスの受難に立ち会っているのだという思いになっていた。いや、立ち会うだけではない、群衆の一人として、今まさに、イエスを十字架につけようとしているのは自分ではないか。劇場にいる人の多くが、恐らくは同じような思いにとらわれていたのではないか。今、自分たちは劇を見ているのではない、イエスの生と死と復活という宗教的儀式に参加したのだ。いつだったか、バッハの「受難曲」をコンサート会場で聴いた時、演奏が終わって、聴衆の誰一人として拍手せず、深い沈黙のうちに、会場をあとにしていったように、イエスが舞台を去っていくと、この劇場に集った4700人の人々が、それぞれに、深い思いを抱いて、静寂のうちに、劇場をあとにしていった。(酒井 記)

④ 静岡 SPAC の『わが町』(演出：今井朋彦、音楽：松本泰幸) 11月14日(日) 14:00～ 静岡県芸術劇場

公演最終日11月14日(日)、13時開場、14時開演。2007年より芸術総監督の宮城聡が、にこやかに来場者を出迎え、時に静かに言葉を交わしている。初冬の柔らかな日差しが入る明るいホワイエには喫茶コーナーがあり、開演までの時間を、広いテーブルに座ってコーヒーを啜りながら、本を読んだり、おしゃべりをしたりして過ごすことができる。日常の忙しさを忘れることができる造りとなっている。場内放送に促されて客席に着くと、「幕なし、装置なし」の舞台が目に入る。再度流れた場内放送は途中で雑音が入り急に音が途切れた。場内の照明が一斉に切れ、舞台も客席も真っ暗になる。劇の始まりであった。

進行役は黒い衣装を、他の登場人物は、それぞれデザインは異なるが白い衣装を身につけているが、その姿が、黒い板と黒っぽい石壁に囲まれた舞台空間に浮かび上がって見える。左右対称にギブス、ウェッブ両家のテーブルと椅子、家の境界を表す木の柵が置かれ、小道具はほとんどない。朝の食事の支度も朝食風景もすべて、マイムで演じられる。実験的な演劇のようでもあるが、身体表現はいたって具体的である。第1幕と第2幕は、どこにでもありそうな日常生活をシンプルに描いていたが、事件らしいことが起こらない分、多少眠気を誘われた。

ジョージの妹レベッカが、グローバーズコーナーから北半球、地球、銀河系、宇宙にまで及ぶ住所

とともに、手紙を読み上げる場面が秀逸であった。テアトルム・ムンディ（世界は劇場）を意識させた。また、結婚式の記念撮影ではカメラマンを買って出た進行役が、シャッターを切る瞬間にいたずらっぽくカメラを客席に向け、切った。彼らの記念撮影は私たちの記念撮影でもある。グローバーズコーナー（地球上の片隅）に生きる人々の営みは、宇宙の営みともその日静岡で芝居を見ている観客の営みともつながっている。

第3幕、墓場では、舞台を照らす照明器具が天井近くまで高く上げられ、空が高くなった。静謐な中で死者たちの会話が交わされ、空間が崇高性を帯びたように思われた。死者となったエミリが、生きていた頃の幸せな日に戻ってみると、登場人物の服はデザインは同じでも、それぞれ色がつき、モノトーンの平凡な世界は急に色鮮やかな世界になっていた。キッチンには鍋や食器が置かれ、ウェップ夫人はボウルと泡立て器を持って朝の支度をしている。「生きているうちに気づきなかった、人生が愛しいって」というテーマが、小道具、衣装を用いて目に見える形でも演出されている。松本泰幸のサクソフォンは静かだが不思議な音色で劇世界に彩りを添えた。演劇は、役者の演技だけでなく、照明や衣装や音楽などの要素からも構成されることを示していた。

『わが町』の公演は、全14公演のうち中高生鑑賞事業が8公演を占めていた。当日200円で販売されていたパンフレットには、中高生に対するメッセージ、『わが町』攻略法など、鑑賞の手引きと同時に「演劇が教育のためにできること」という保護者向けの記事が掲載されている。演劇の可能性を示して、演劇を公共事業とするための説明責任を果たそうとする意志と読み取れた。静岡の試みが成功するかどうかは別にしても、静かな感動をもたらしたこの公演によって、人生観を広げた若者がきつといたに違いない。

（服部 記）

④愛知県立芸術大学オペラ『カルメン』 12月4日(土) 夜公演 長久手文化の家 森のホール

毎年恒例となっている愛知県立芸術大学のオペラは、昨年までは、「大学院オペラ」であったが、今年度は「愛知芸大オペラ」と銘打って公演された。予算の付き方が違うのか、外部に発信するにはこの方が好都合なのかは、不明である。確かに、舞台美術に美術学部日本画専攻が参加し、特に最終幕での、「砂子」という表現技法を用いた、薔薇の花が浮かび上がる舞台美術はすばらしく、「芸大オペラ」というにふさわしい。（もちろん、舞台美術は、例年美術学部が担当していた。）しかし、音楽専攻生にとっては、公演成功に総力を挙げたことに変わりないと思われる。

ここ数年大学院オペラの演目はモーツァルトの作品であったが、今年は5年ぶりに、ビゼー作曲『カルメン』であった。この作品は、P.メリメの小説（1845）をオペラ化したもので、1875年パリのオペラコミック座で初演された。闘牛やフラメンコで有名なスペインのセヴィリア地方を舞台にしたオペラは、異国情緒やファム・ファタル（運命の女）等の内容といい、台詞の対話部分に伴奏の施されていない形式面でも、モーツァルトのオペラとかなり異なる。観客は、字幕を気にすることなく、日本語で芝居の流れを追っていくことができた。

シンプルな舞台装置であった。何もない舞台中央を取り囲むように、その周囲にすり鉢状に階段が作られ、場面に応じて、広場、酒場、山中、闘牛場となる。オーケストラが前奏曲を奏でている間、

舞台ではホセが絞首刑に処せられる様子が示された。物語が語り終えられた後、物語の外の起こるかもしれない処刑を見せる必要があるのか疑問を抱いた。しかし、運命の女、カルメンの物語を現前させようとする演出家の意図が細部にまで行き届いているのを感じた。第4幕での劇場空間の使い方が、特に秀逸だった。花道から闘牛士を入場させ、劇場内が闘牛場と化し、大いに盛り上がった。さらに、舞台上の闘牛を楽しむ群衆たちを静止させ、舞台中央でホセのカルメン殺しを前景化して、闘牛場の内と外の惨劇がパラレルであることを示していた。飯塚励生の演出は芝居として十分楽しませてくれた。しかしその反面、そうであるが故に、一部日本語が聞き取りにくく、台詞が棒読みであったこと、ソリストが透けて見えて役柄と一致しないように感じられたこと、などが気になった。原語上演ならば気づかなかったかもしれない。

合唱やダンスなどは非常に鍛えられていた。特に名古屋少年少女合唱団の子供たちは表情や動きも良く、すばらしかった。また、オーケストラも大変良かった。よくまとまっているけれど、若さと情熱があり、鍛えられているという印象であった。ピットをのぞき込むと、指揮者佐藤正浩のやりたいことがよく見え、舞台上とピットの音楽が少しずれたときには、すぐに修正されていた。個々の団員の研鑽の賜であろうと思われる。タイトルロールを含めたソリストに関して、声楽の場合はまだまだ発展の途上と思われるが、それぞれの長所をうかがい知ることができた。

不況の嵐が吹き荒れ文化活動がおざなりにされそうな時代にあって、日々努力を重ねる若い芸術家たちが活躍でき、私たちもその成果を享受できる社会がくることを願って、長久手の会場を後にした。

(服部 記)